

2022年度神戸大学文学部公開講座「日常と非日常のはざま」

< 講義概要 >

10月1日(土) 13:40~15:10 安倍 里美 講師

「自分を変えること」が難しいのはなぜか—『春にして君を離れ』をヒントに—

雑事に追われる日常を離れ旅先で時間を持て余していると、訳もなく来し方が思い出され、それまで気にも留めていなかった断片的な記憶が思わぬ仕方で意味を持ち、大いに狼狽える…。A. クリスティの小説『春にして君を離れ』において描かれるのは、まさにこのような陳腐とも言える経験である。中東のとある鉄道駅で数日間足止めを食らったイギリス人女性が、沙漠という非日常の空間に揺さぶられ、良妻賢母として家族を正しい道へと導くものであったと信じていた自身の行動が、実のところ配偶者や子どもの自尊心を傷つけ、信頼関係を築くことの妨げになっていたことを悟る。彼女はこれからは真摯に家族と向き合うことを決意するのだが、帰国して日常が再び思考に浸透しはじめると、彼女はこれまで通りの振る舞いをするを選択してしまう。

この作品の主人公がたどる道德心理学的な現象の描写は説得的であり、このような現象が生じることの想像することに大きな困難はない。そして、この事例は、道德についての客観的真理の発見と呼ぶべきものがありうることと、私たちの道德性が場合によっては「普段の雰囲気」に飲まれてしまうような(A. クリスティの表現を借りるなら、万華鏡の模様のような)ものであるということが両立することを示すと考えられる。しかしながら、これまで道德についての哲学的議論は、このような事例の存在に十分に注意を払ってこなかったように思われる。本講座では、雰囲気に流されうるものとしての道德性についての説明を試みる。この説明は同時に、我々の実践を柔く縛るものとなりうるという側面に注目した、雰囲気の本性の部分的な解明を提供しうるものである。

10月1日(土) 15:20~16:50 早川 太基 講師

自分の世界のつくりかた—宋代文人の詩を読む

「日常」は、一瞬にして「非日常」に変化する脆さをふくむ。むしろ「日常」とは往々にして、社会的秩序が壊れてゆくときに強烈に意識され、同時にそこへの回帰が熱望されている概念でもある。そうであればこそ時には、魅力ある文学的創作の原動力でもあった。

本講義のテーマである宋代の社会形態は、じつは現代の日本に似ている。この東アジアの経済大国は、平和を金で買い、言論に自由があり、多くの芸術文化を生みだした。しかし靖康元年(一一二六)、北方の女真族の南侵によって宋代の「日常」は崩壊した。

この混乱期に生まれた二つの文学がある。一つめの孟元老『東京夢華録』は、失われた都の繁栄を、風俗習慣をふくめて丹念に描きだす。二つめは、詩人の陳与義(一〇九〇~一一三八)による作品群であり、たとえば逃避行のなかで、雨あがりの蜘蛛の巣の水滴が夕日にきらめく情景に「詩情」を発見する。

前者は、時代に即した文学であり、失われた美しき「日常」を、自分の言葉のなかに蘇らせた。後者は、一人の人間に即した文学であり、「非日常」の境遇においても新たな美を、言葉の世界のなかに表現している。いわば両者は、異なる方法ながらも、心の目で見つめた世界を言葉にしてみせた。そこには混乱した社会のなかでの個人の心のありかたの模索のかたちが示されており、読者もまた、あるいは自分の問題として考えることが可能である。

10月8日(土) 13:30~15:00 齋藤 公太 講師

日本の古典受容史と戦乱の記憶

日本の古典に限らず、何らかのテキストをいかに解釈するかということは、読み手が置かれている時代状況と切り離すことができない。したがってテキストの解釈は時代ごとに変化していくのであり、その歴史はある種の思想史として読み解くことができる。今回の講義ではそのような視点から、日本の古典に記された戦乱の「記憶」が、時代をおって変化していく過程を紹介したい。

戦乱とは「非日常」の極みであり、安易な解釈や理解をはばむ出来事である。しかし「日常」が取り戻されるにつれ、戦乱は物語としてテキストに記され、共同体の集合的な「記憶」として受け継がれていく。そのようなテキスト解釈の歴史は、戦乱という出来事からさまざまな意味を汲み取ろうとする試みに他ならない。戦争という出来事をいかに意味づけ、語っていくか。それが今なお私たちにとって避けがたい課題である以上、過去の解釈の歴史を振り返ることも無意義ではないだろう。

今回の講義では、とりわけ『太平記』に記された楠木正成の戦いとその死という出来事を取り上げ、『平家物語』において語られる平敦盛の死の解釈とも比較しつつ、近代にまで至る解釈の歴史について概観する。そのような歴史と神戸との関わりについても適宜触れていきたい。

10月8日(土) 15:10~16:40 藤澤 潤 准教授

ソ連の対東欧軍事介入

2022年2月にロシアが一方向的にウクライナに侵攻したことで、多くの無辜のウクライナ市民を巻き込んだ血みどろの戦争がはじまりました。それ以来、毎日のように戦争の凄惨な情景がマスメディアやSNSを通じて世界中で発信・共有され続けています。同時に、どうすればこの戦争は終わるのか、ロシアの目的は何なのかといった問題について、様々な視点から議論がなされています。本講義では、これらの問題について歴史的視座から考えてみるために、少し迂遠ではありますが、冷戦期のソ連による東欧諸国への軍事介入の歴史を繙いてみたいと思います。

第二次世界大戦の終結とともに、ソ連は東欧諸国を勢力圏に組み込み、40年以上にわたってこの地域を支配し続けました。その間、東欧の人びとも唯々諾々とソ連に従ったわけではなく、反ソ蜂起や民主化運動などが起こりました。これに対して、ソ連指導部は、1953年に東ドイツ、1956年にハンガリー、1968年にチェコスロヴァキアに軍事介入し、武力で現地の民衆の動きを封じ込めました。では、どのようにして軍事介入の決定は下されたのでしょうか。意外かもしれませんが、ソ連指導部内でも軍事介入をめぐる様々な意見があり、必ずしも最初から軍事介入支持派が優勢だったわけではありませんでした。そこで本講義では、1968年8月のチェコスロヴァキアへの介入などを例に、軍事介入にいたる具体的な政策決定プロセスについて検討します。